

欧州でみた日本植物研究史 I

清水 建 美

T. Shimizu: A historical outline of the investigation on the Japanese flora in Europe I

日本植物の研究史は、小泉源一（1932, 36）、大井次三郎（1953）、上野益三（1973）、木村陽二郎（1973）などにくわしい。私は、1974年9月から1年間、北欧および西欧の各国を訪問し、この間できるだけ日本植物研究史を語る各種の資料を実見することに努めた。ここでは、それらの資料を紹介しながら、改めて欧州における日本植物研究の足跡をたどってみたい。

いうまでもなく、日本植物の研究は、明治初期の矢田部良吉、牧野富太郎らに至るまで、17世紀以降ほぼ200年間はもっぱら欧米人の手によっておこなわれ、しかも、その研究の中心は時代とともに国から国へと移り変った。西洋の書に現われた最初の日本の植物は、オランダのブライン G. Breynia (1637~1716) によって1679年に紹介されたサツキツツジであるという。彼は「珍稀植物予報」(I, II および図説) という本を書いて、その36~37頁に *Chamaerhododendron exoticum* という名の下に9行にわたって当時オランダで已に栽培されていたサツキツツジの解説をおこなった。



図1. ブラインの書いた「珍稀植物予報」(左)は第1巻の表紙、(右)は図説の中のチョウセンニンジン

リンネは、彼をチョウセンニンジン *Ginseng* の専門家として挙げているが、事実、ブラインはこの本の図説の部の35頁から53頁までにわたってチョウセンニンジンの解説をし、美事な図も書いている(図1)。

ところで、日本にはじめてやって来た植物研究家は、ドイツ人クライエルであった。この拙文では、日本植物研究史の探訪をクライエルと関係の深いベルリンから始めることにしよう。

1. ベルリン

サカキ属 *Cleyera* にその名を残したクライエル A. Cleyer (?~1697) は、園芸家のマイステル G. Meister とともに、1682年8月長崎のオランダ商館長として来日、翌年10月まで滞在、その後

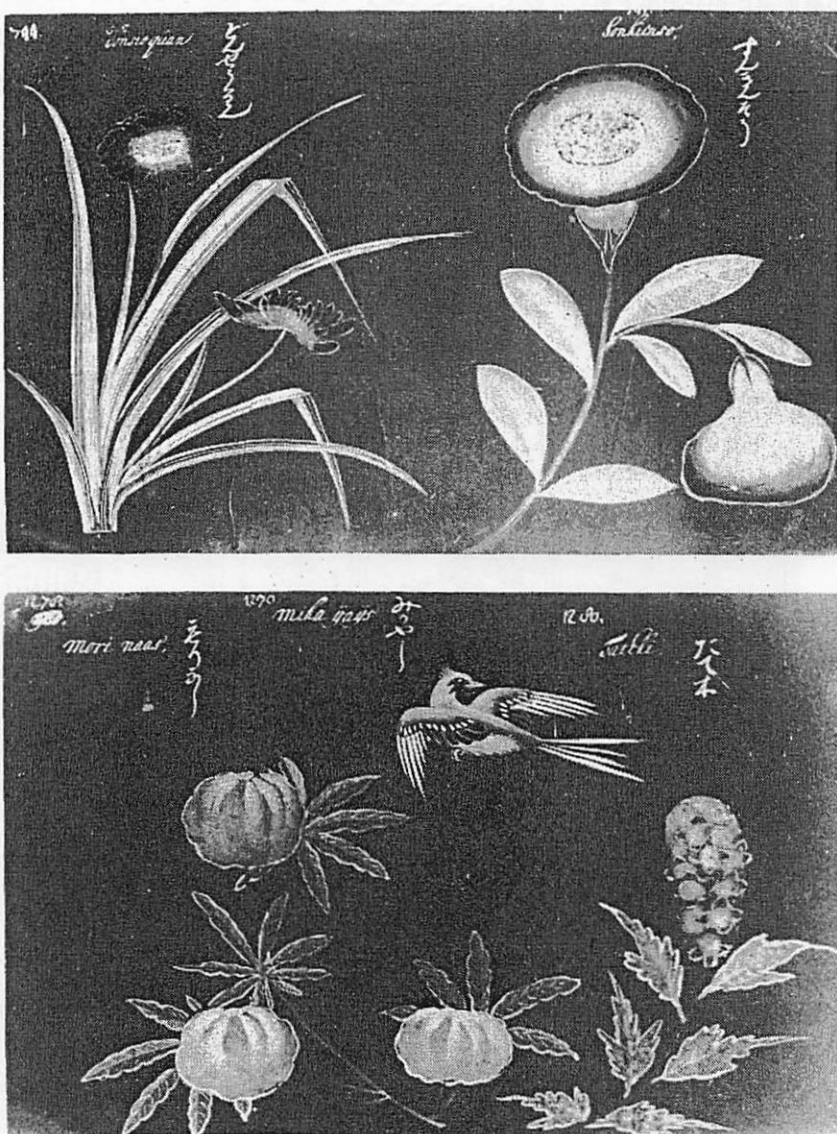


図2. メンツェルの「日本植物誌」
(上)は744, 745図, (下)は1278~1280図

1685年8月から翌年10月まで再び来日した。2度目の来日の折には、密貿易をしたという疑いで国外追放の憂き目にあい、この時関与した日本人19名は重刑を課せられたという。

クライエルは、滞在中は大いに日本の植物の観察につとめ、その記録を作るとともに花鳥図を収集、これをブランデンブルグの友人メンツェル C. Mentzel に送った。メンツェルは、ツツジやヒガンバナなど53種についてのクライエルの植物メモを、1686年から1700年の間に印刷公表したが、原色の花鳥図は2冊に製本し、「日本植物誌Ⅰ、Ⅱ」の名を与えて、1695年にベルリンの王立図書館に納めた。これは印刷公表されたわけではないが、「日本植物誌」の名のある最初の作品であって、現在は西ベルリンの国立図書館東アジア部門に保存されている。これについては、「北陸の植物」の最新号に紹介記事を書いたので、ここでは1~1360図のうち、入手した第2巻744~745図および1278~1280図を紹介しておくに止めよう。744図は、花はキク科植物の頭花のようにみえ舌状花部分は白色、どんせうくわん *donsioquan* の名がある。745図は花冠部分は赤で、すんきんそう *Sonkinso?* の名がつけられている。一方、1278図には褐色の掌状複葉と橙黄色の大きな果実が描かれ、植物名はもりなし *mori naac* と読める。1280図は赤色の円柱花序をもつ花で、たて木 *Tateki* の名がある。まん中の1279図はみかわし *mika ijaijs?* という鳥である。この本の巻末近くの1311~1358図は野鳥および家禽が連続しているが、外にもこの図のように鳥の図がはさまれているようである(図2)。

クライエル自身もまた、今度は欧州人の画工に描かせて、「日本植物誌」を作っている。これは、約100点の植物図から成り、シーボルトが一応同定した。この第二の「日本植物誌」もベルリンに



図3. マイステルの「東洋・インド園芸造園術」の表紙

あったが、残念なことに、1945年以降消失してもはやみることができない。

クライエルは日本からジャワに帰って一生ジャワで過したが、クライエルと一緒に日本にやって来たマイステルは、1688年頃にオランダに帰り、1692年に「東洋・インド園芸造園術」を刊行した。この中には、モミノキ、オモト、ツタ、ミカン、クリノキなど、86種の日本植物の解説が含まれていて、日本の植物に関する最初のまとまった本だといわれている（図3）。

2. ロンドン (1)

ロンドンの大英博物館は、医師であり王立協会の会頭であったスローン *H. Sloane* (1660~1753) のコレクションを土台にして、1753年にできた。スローンは、その財力にものを言わせて、自然史関係、歴史・考古学関係を問わず、また、標本・原稿を問わず膨大なコレクションを残した。大英博物館の自然史部門はやがて1881年には独立した。現在、大英博物館（自然史部門）の植物標本室は、一般植物、英国植物、隠花植物の三部に分れているが、一般標本室の一角にスローンが集めた何冊もの腊葉帖が、「スローン標本庫」として一括保管されている。その腊葉帖の一冊 (*H. Sloane 211*) にケンベルが採集した日本の植物が入っている。

ドイツ人ケンベル *E. Kaempfer* (1651~1716) は、1690年9月に長崎のオランダ商館医として来日、翌々年の10月まで滞在した。この間、主として長崎附近の植物を調べるとともに、2度にわたって、初回は2月13日から5月7日、2回目は3月2日から5月2日に、長崎・東京間を往復し、春の植物を採集した。腊葉帖 (*H. S. 211*) は、大きさ54cm×40cmで、111枚の台紙から成り、*Engelb. Kaempfer, Plantae Japon. Pers. & Ceyloniensis* の標題がつけられている。ケンベルは、日本に来る前は5年近くをベルシャで過ごし、来航途上ではセイロンなどにも立ち寄っているため、ベルシャやセイロンで採集した植物も一緒に含まれているわけである。内表紙には、手書きでこの標本が1691年および1692年にケンベルによって日本で採集されたものであり、ベルシャおよびセイロンの標本も入っている旨が記されている。

日本の採集品の一部を抜き出すと次のようである。

- 13枚目 ネズ, アオキ
- 20〃〃 ヤブニツケイ, クスノキ, ネズ, 不明1
- 23〃〃 ソテツ, ツバキ, ヤマグルマ
- 24〃〃 コウヤマキ
- 25〃〃 チャ・Hibiscus
- 29〃〃 テイカカヅラ, シハイスミレ, カタバミ
- 32〃〃 タブノキ, ツバキ, ネズミモチ
- 47〃〃 アラカシ, ユキヤナギ, イロハカエデ, ヤマブキ, 不明1
- 49〃〃 テイカカヅラ, リュウキュウハゼ
- 82〃〃 ウルシ
- 91〃〃 イチョウ, アリドウシ, スルデ

111枚目 ヤマゴボウ、ユキノシタ

ケンベルは、1712年に有名な「廻国奇観」*Amoenitatum Exoticarum* という本を出版し、異国での見聞を紹介して、その第5部(765~912頁)をもっぱら日本の植物の報告に当てた。この本には、メンツェルと異って正確な植物図と十分なラテン語の説明がある。そこで、リンネは1753年「植物の種」の中で、クスノキ、チャ、カヤ、ツバキ、サルトリイバラなどの日本植物は、標本を見ることなくケンベルの図を根拠にして発表したのである。腊葉帖の13枚目と23枚目の写真を示そう(図4)。13枚目は、ネズとアオキであるが、アオキの方には "*Aucuba Kampf. am. 775*" とい

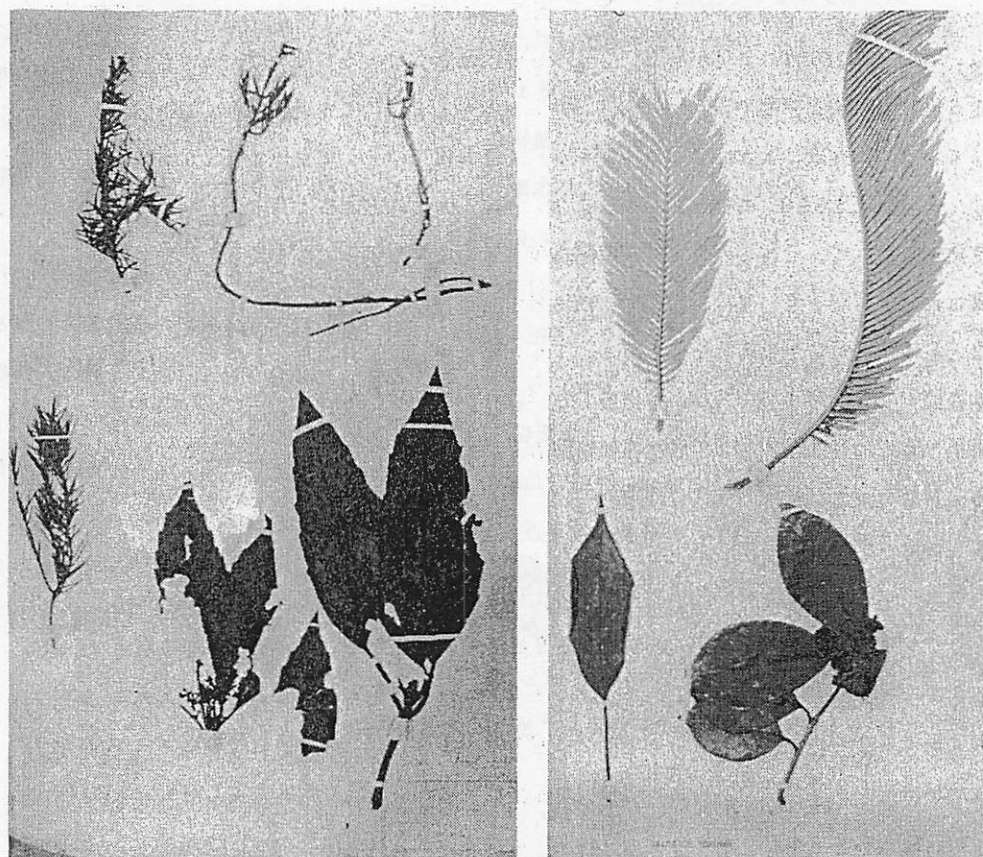


図4. ケンベルの採集した日本植物

(左) 腊葉帖13枚目のネズとアオキ

(右) 腊葉帖23枚目のソテツとツバキとヤマグルマ

う手書きがある。これは、「廻国奇観」の775頁に引用されたという意味である。実は、上記の植物リストの中で下線をつけたものは、そのような注記のある植物である。アオキの標本には、さらに、"*Aucuba japonica Thunberg*" というツェンペリによる同定ラベルがつけてある。23枚目には、ソテツとツバキとヤマグルマが貼ってある。ソテツには、"*Soteth R.H.1360*" の注記があり、ツバキ

には「*Tsubakki Am. Ex. 850*」と附記してある。ツバキには、その外、比較的新しいラベルに、「*Camellia japonica L. Tsubaki Lectotype Kaemp. Amoen. 851*」と書かれている。ヤマグルマには、とくに判然とした注記はない。

ケンベルは、自らの原稿のすべてを「廻国奇観」に発表したわけではない。未発表の原稿や植物図は、なお大英博物館の原稿部門に大切に保管されている。すなわち、*Manuale Botanicum* (保管番号 *Sloane 74*) および *Descriptio Plantarum Japonicarum* (保管番号 *Sloane 2915*) である。ここではすべての資料が撮影禁止になっているので、実際の原稿をお目にかけることはできないが、前者は 19.8×7.5 cm の小冊子で60枚から成り、300種近い植物のラテン文による説明がぎっしり書き込まれ、ところどころに花序、果実、枝葉の巧妙なスケッチが入っている。53枚目の裏表紙には、*Feb. 27, 1691* の日付があり、54~60枚は索引である。後者は、大きさ 37×21.5 cm の168枚から成る原稿で、2~6枚目が索引、8~11枚目に4点の美事な植物図が入って口絵になっている。本文は、13枚目のクスノキから125枚目のケタデまでの250余種の解説であり、冒頭に *Novemb. 1690* の日付がある。クスノキほかところどころに *Am. Ex. p. 770* のような書き込みがあって、それらの記事が「廻国奇観」の中で発表済みであることを示している。126~162枚は、植物雑記ともいうべきもので、植物名の記録、みそやしょうゆの作り方、シキミと仏教のことなど多岐にわたった記事になっている。168枚目は、総索引である。ケンベルは1727年に「日本の歴史」*History of Japan* を出版したが、この植物雑記が役に立ったものと思われる。なお、この原稿の本文に対応して、256枚の植物図もここに保管されているが、残念なことに、私は直接に見る機会をもてなかった。

3. ロンドン (2)

ロンドンの中心ピカディリー・サーカスにほど近いバーリントン・ハウスの一隅にリンネ協会がある。リンネ協会は1788年に創立、1802年には王立となった。初代リンネ協会の会頭になったスミス *J. Smith* (1759~1828) は、リンネの残した標本・図書・原稿を夫人から買い上げ、1784年にスウェーデンからロンドンに運んだ。それらは、その後しばらくスミスの手もとにあったが、リンネ協会は、1828年の彼の死後直ちに購入、以来最も充実したリンネ資料の殿堂になった。現在、リンネのコレクションは、完全に環境調節された地下の一室に厳重に一括保管されている。

いうまでもなく、リンネ *Linne* (1707~1778) の「植物の種」(1753) は植物の命名の出発点である。先に述べたように、彼はこの本の中に日本の植物としてクスノキ、ツバキなど15種を挙げているが、標本はみていない。リンネがはじめて日本の植物を実見したのは、ドイツ人の医師クラインホフ *C. Kleinhof* (?~1777) の採集品である。クラインホフは、1741~58年にはオランダの東インド会社に勤めジャワに滞在したが、日本には1759年来て、採集品はオランダのブルマン *N. J. Burmann* (1706~1779) に送ったといわれている。リンネは1735~38年に

は、オランダを訪れているので、ブルマンとは古い仲であった。そんな関係から入手したのであろうか、リンネは、はじめて標本を見て、エンジュとオニタビラコとツワブキの3種を1767年に「植物の補遺第1版」 *Mantissa Plantarum ed. 1* に報告し、さらに、1771年にはその第2版（第2巻というべき）にハゼノキ、ヤマブキ、イチョウを発表した。リンネ協会の標本室でこれらの標本を自由に見ることができる。そのうちオニタビラコとツワブキの標本を示しておこう（図5）。

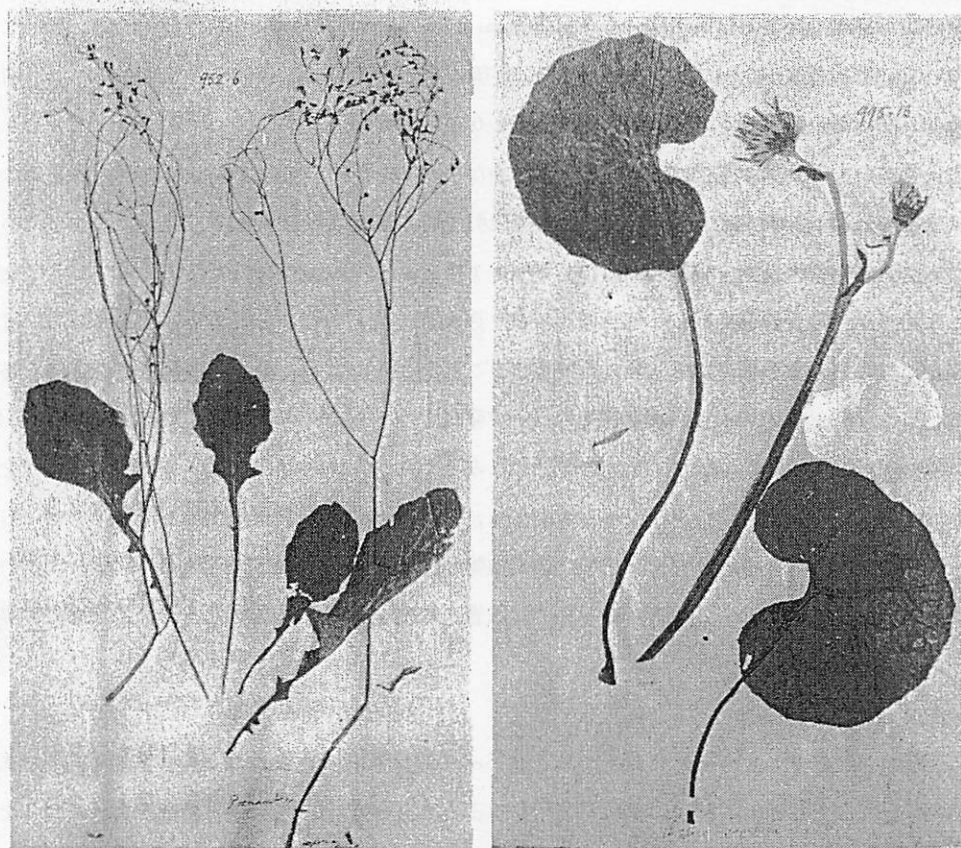


図5. リンネ協会に保管されているクライノーフ採集の日本植物
(左)オニタビラコ、(右)ツワブキ

前者はリンネによって台紙上に *Prenanthes japonica* と命名され、産地名 *japonia* の字が書かれている。後者には *Tussilago japonica* の名と *japonia* の地名が書き込まれている。952-6と995-13は属番号とその属内の標本番号で後から書かれたものである。どうしたわけか、ブルマン自身は、「インド植物誌」（1768）の中で、エンジュとツワブキに重複して新しい名をつけている。

4. ウプサラ

リンネは、1741年以後はウプサラ大学の医学・植物学の教授であったが、彼が63才のときツェンペリ C. P. Thunberg (1743~1828) が入学した。ツェンペリは、リンネについて9年間勉強した後、1770年ウプサラを出発、アムステルダム、パリ、ケープタウン、ジャカルタにそれぞれ滞在、1775年オランダ商館医として長崎にやって来た。翌年3月から6月にかけて、長崎・

東京間を往復したが、機会をみては植物採集に努めた。そして、その年の11月に日本を離れ、ジャワ、セイロン、オランダを経、大英博物館のケンベルの標本や原稿をみた後、1779年、すなわちリンネが死んだ翌年にウプサラに帰った。1783年には、リンネ親子のあとをついで、ウプサラ大学の正教授となり、やがて、「日本植物誌」(1784)や「日本植物図説1~5」(1794~1805)などの大作を出すことになる。

ツェンペリが日本で採集した標本は、方々にちらばっていて、たとえばヘルシンキ大学にはハマビワやオトコヨモギの重複標本があったりするが、少なくとも正標本の大部分は、ウプサラ大学の植物標本室に続くいわゆるリンネホールにある。それらは、ケープタウンやセイロンの植物とともに30個の小さな白ペンキぬりの標本箱に、ツェンペリの標本庫としてきちんと整理されている。標本箱の前には、ツェンペリの大理石の胸像が置かれていた(図6)。

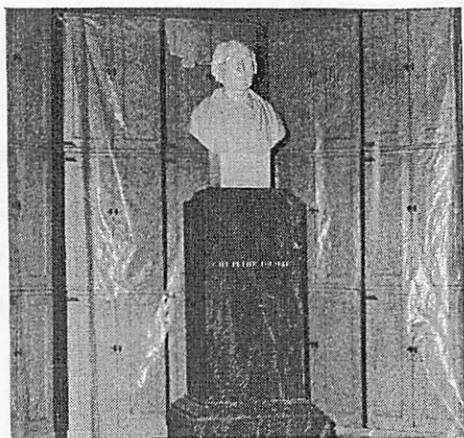


図6. ウプサラ大学植物園のリンネホールにあるツェンペリ標本室

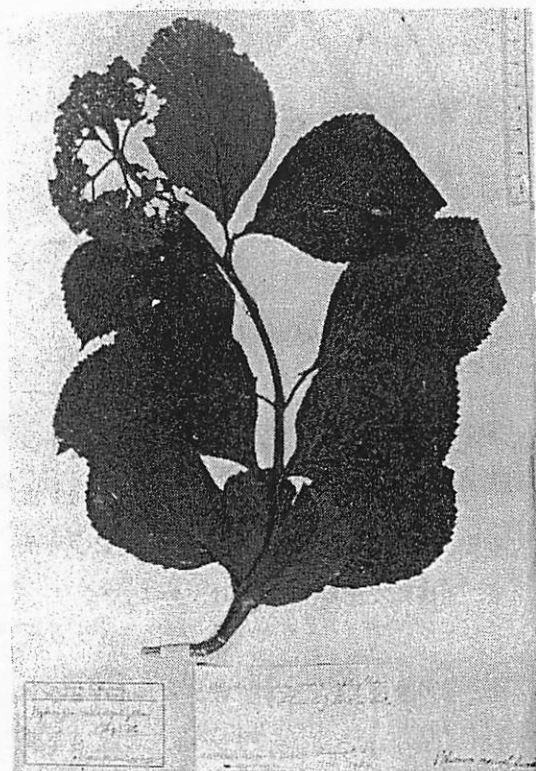


図7. ツェンペリが *Viburnum macrophyllum* と同定したアジサイ

ツェンペリの植物標本は、大きな2冊の手書きのカタログ *Catalogus Herbarii Academiae Upsaliensis Tom 1&2* (1820) にまとめられている。このカタログは、マルクリン G. Marklin という人が作ったもので、第2巻の巻末にはツェンペリ自身も誤りのないことを認めて署名している。第1巻を開いてみると、中表紙には *Catalogus Naturalium Academiae Upsaliensis Herbarium* とある。植物の配列は、リンネの24綱分類に従い、第1巻は属番号1番の *Canna* から964番の *Caltha* まで797頁、第2巻は965番の *Ajuga* から1863番 *Puccinea* までと索引の計785頁からできている。標本館のトゥーリン博士は、このカタログに名前があって標本のないもの100点余、カタログになくて標本のあるもの124点あると話していた。

標本には一枚ごとに、右上に一連番号が記

されている。たとえば、7405はアジサイであるが、ツェンペリはこれをガマズミ属とみなして、*Viburnum macrophyllum* αと同定した。この標本には、小泉源一（1925）とマック・クリントック（1954）による2枚の同定ラベル — *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) DC. — が貼ってあった（図7）。注意すべきことは、採集地などのデータは、裏面の左上隅に記されていることである。このアジサイの標本には、小さく *E. Japonia*, Thunberg と記されている。ついでながら、ツェンペリの標本もリンネの標本も、歴史的に重要な標本は今では完全に撮影され、マイクロフィッシュとして市販されているので、写真ならどこでもみることができる。

参 考 文 献

- 上野 益三（1973） 日本博物学史 平凡社 東京
 大井次三郎（1953） 日本植物調査研究史 日本植物誌（17～20頁）至文堂 東京
 北村 四郎（1975） ケンベルの「日本植物記」について 植物と文化 13, 2～13
 木村陽二郎（1974） 日本自然史の成立 — 蘭学と本草学 — 中央公論社, 東京
 小泉 源一（1932） 日本植物研究史略 植物分類, 地理 1: 1～10
 ———（1936） 日本植物の研究 同上 5: 1～26
 清水 建美（1976） Menzelの「日本植物誌」について 北陸の植物 23: 75～77
 Stafleu, F. A. (1971) *Linnaeus and the Linnaeans* Utrecht

長野県植物研究者伝 I

田中芳男抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Sir Y. Tanaka

大井博士の「日本植物誌」（25頁）に日本の「明治時代の有名な植物学者、田代安定、田中芳男、矢田部良吉、松村任三、伊藤篤太郎、宮部金吾、牧野富太郎など」とあげられているその田中芳男は、長野県の出身者であるが、今は知らない人が多い。

田中芳男の名を学名にとどめたものには、次のようなものがある。

Tsusiophyllum tanakae Maxim. ハコネコマツツジ 1870年。 *Saussurea tanakae* Fr. et Sav. セイタカトウヒレン 1874年。 *Scutellaria tanakae* Fr. et Sav. コナミキ 1874年。
Tanakaea radicans Fr. et Sav. イワユキノシタ 1875年。 *Vicia tanakae* Fr. et Sav. オオバクサフジ 1875年。 *Cardamine tanakae* Fr. et Sav. マルバコンロンソウ 1875年。
Loranthus tanakae Fr. et Sav. ホザキヤドリギ 1876年。 *Stephanandra tanakae* Fr. et Sav.